

中東の日本研究 拠点・カイロ大学

長野 隆

▼中▲

が、学生たちの戸惑いは尋常ではなかった。無理もない。学部四年間で修得した彼らの日本語能力は、まずは会話であり、そして学科目の日本文学・日本語学・日本思想の三本柱については、テキストのリーディングがせいぜいで、いわゆる学問なるものの輪郭については全くの素人としてよかった。

学部一年時から初めて日本語に触れてきた彼らに、それは当然の実情のようにも覚え、たが「文学」とはどんなものか、くらいは事前の了解事項であろうと、こればかりは私の不覚で、ふいに昨今日本で叫ばれる学生の「書物はなれ」が奇異な重みをともなうて脳裏をよぎったのは確かだ。

大学院予備課程の重要科目の一つ「文学テキスト」で私が配布教材として用意したのは新潮文庫の太宰治四冊であった。初期作品を収録した「晩年」、中期の入り口に立つ代表的短編収録の「走れメロス」、またその出口に立つ終戦間際の「津軽」、そして後期の主要短編を収める「ヴィヨンの妻」の四冊である。

これらに、まずは読んでくるとように指示し、その初期・中期・後期の変容を講義し、納得させることが目的だった

■講義の理解に手ごたえ■

の講義に並行させながら、私にはひたすらそれを説いた。臆（おく）することなく文学的デカタンツをも、大学や大学院生とはどうあるべきかも、また彼らには刺激の強すぎる表現も避けはしなかった。太宰の作品「心の王者」を別途コピーして、得々と説教した

ぼくを慕い来年四月からの日本への留学を勝ち取ったアマド君は、太宰治に標的を定めた。そのため、しきりに弘大大学院への留学を希望し

カイロ大学の教室と学生たち

たが、ぼくは東大の安藤宏教官に就くべく説得し周旋した。冷静に彼の将来を考えれば、残念だが、当然の配慮だと思った。

「津軽」を輪読した際の津軽紀行は、皆の想像を駆り立てた。あるいは「父」や「家庭の幸福」こちらは多分に難解な人間理解や日本理解を彼らに投げかけ、特に「義」という問題について連日にわたり議論を交わしあったことは、今でも懐かしく思い出される。宗教的規律を背景に置く厳格な生活倫理の支配下において、日本的「義」、それもとりわけ太宰治の「義」とは、難解以外の何物でもなかった。

それでも思い出す。女子学生たちに誘導されて、皆でボウリングに時を費やした翌日、「先生は昨日『義』のために遊びましたねえ」と、ニヤリと笑ったアマド君。太宰の「父に言う父はどこかで、義のために遊んでいる。地獄の思いで遊んでいるの一節が、すでに何がしかの手ごたえです。だからぼくも即座に笑い返すことができた。かもね」と。（弘大教育学部教授）

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです